

分かる話は

「訓読み」で

(株)アルティスタ
人材開発研究所
代表
玄間千映子

異なる言葉を話す者同士の円滑な疎通には、双方の価値観、世界観の共有は必須で、それが弱いと疎通の難しさが生じてくる。ところが同じ日本語を話す日本人同士でも、疎通の難しいことがある。

会議時間の短縮化、情報共有の流れを良くするためにやれることは何かを考えた。たとえば、「人々が互いに関わり合って生きて暮らしていく場」のことを、日本語では「世の中」とも「世間」とも「社会」とも言う。言葉が違うのだから、意味も違うはずだが、その識別はあいまいだ。その原因は一つひとつの単語が抱える世界観の違いの未整理にありそうだ。

一つの言語は一つの世界観、価値観の中で培われていくものだが、日本語には一つの言語の中で「和語、漢語、西洋文化の日本持ち込みに伴う翻訳造語」のそれぞれが抱える

異なる世界観が、混在している。

「世の中」というように、漢字の読みが訓なら「八百万(やおよろず)」や「和」という和語の世界観の言葉なので、「世の中」には自分を軸にしているけれども「平和な世の中」というほんやりした「有情の空間」が無理なく伴える。「世間」というように音読みなら、「世間体」や「世間の目」というように、他人の視線を伴う自分の行動する範囲の外側には漢語の世界観である「仁・義・礼・智・真」など中国思想が漂っているなど、「世の中」よりもだいたい具体的な空間を指している。

殆どの言葉は漢字の読みの音訓で、この2つの世界のどちらに入るかは大概識別できるのだが、やっかいなのは漢字による翻訳造語の存在だ。

翻訳造語は西欧文化を日本に紹介するために造語されたので、言葉が

背負う世界観は西欧文化だが、その言葉は国内では懂れとともに最先端の文明として使用されたので、翻訳造語はピッカピカで、「自己、自由、権利、論理」といった頭脳明晰で、最新鋭な空気感をともなっている。翻訳造語された和製漢語一覧 (<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~shu-sato/kanji/waseikango.htm>) を眺めると、和語にも漢語の世界観にも当てはめにくい言葉だということが伝わってくる。

その西欧文化から翻訳造語の「社会」を眺めると、「世の中」と重なる部分もあるが時間的概念は伴わず、公共的性質が伴うなど、微妙に「世の中」とも違っていることに気付く。

私たち日本人はこうした言葉が背負っている異なる世界観を見事に使い回すことで疎通しているのだが、気になるのは使い回しの個人差だ。その個人差が、疎通のまずさに繋がってくる。そこで、こんな世界観の個人差など気にせず確実に伝える言い方も見つけた。落語など、日本の噺やヒットした歌謡曲の歌詞は殆どが、訓読みだったのだ。

それに倣えば、漢語の「会議」は「考えを合わせるために話し合う場」、翻訳造語の「応援」は「支え助ける」

となる。円滑な疎通には、ピッカピカな言葉、音読み漢字の言葉は、訓読みの言葉に言い砕くことが日本語では円滑な疎通のコツになりそうだ。日本語は複雑だが、重層化の構造は意外にスッキリ、単純だ。

空気の流れのよい職場とは、案外、こんなことで生まれるのかもしれない。

【筆者略歴】
玄間千映子 (げんま・ちえこ)



(株)アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大學卒。米インマヌエル大学大学院卒業後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。現在、日本経済大学大学院非常勤講師、信州大学コーディネーター兼先端材料研究所野口研究室技術アドバイザー、(一社)水底質浄化技術協会監事などを兼任。著書に「朗働の時代」「ジヨブ・ディスタクリプション一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。

